

こぼれた愛 一幕一場

MAY 18 1928

林田 盛雄

加来正夫 店員
妻 敏子 女給
娘 静子 六才位
西村一朗 紳士賭博者
山田珠江 女給
谷本繁三 支那メシの主人

現代

加州 羅府市 正夫の宅

円卓を圍んで食事最中の臺所にして 正夫 敏子は 娘を挟んで並び
一朗は其差向ひに珠江と並んでゐる 正夫 一朗 共に可なり酔つてゐる

正夫 (愉快に、盃を一朗に差す) さあー
(敏子に向かって) 今夜はお禮にうんと飲んでもらわなくちゃならぬ さあ 一杯
一朗 (敏子の給仕を受ける) やあ たくさんです
正夫 まあ いいでしやう 間 何ですなあ谷本さん 矢ッ張何と言つても このカライ奴でなくちゃ商賣にはならんでしやう
西村 (狡猾さうに) そうですなあ 禁酒 禁酒 言つたつて飲みたいのはどうする事も出来ませんからなあ
敏子 (陽気に) そうですわ お金さへありや何處ででもやれますものねえ
珠江 ええ 貧乏人が苦しむだけですわ 本当に 労働者は悪い酒を飲まされて つまらないわねえ
西村 (敏子を一べつして) 僕んどこなんか 他より随分好い酒だから 實際其点から言つたらなあ
加来 (頷く) そうでしやう 随分賣れるでしやうね?
敏子 (珠江を見て) ねえ そりや 九時過ぎ頃になると、ひっきりなしだわ
珠江 (わざとらしく甘く) 谷本さん どの位賣れまして
西村 (考へる風で微笑し乍ら)
そうだなあ 土曜日や日曜日は例外の倍としても 平均ギャランのハーフですかなあ カップで三十杯の三十弗ですか そんなもんでしやう
加来 (仲ば警?的に) 賣れますなあー

敏子 そりや賣れますわ でも (西村をちらとみる)

間

西村 禁酒官がなあ (困った表情をする) 禁酒官にやられるんで 結局一杯一杯位のもんです

加来 禁酒官なんて言わぬが 又得たいの知れん奴等だから

西村 奴等にやかなわんですなあ (調子を変へて) どうも、日系市民の犬がゐますで こいつが一番仕末が悪いです

敏子 全く アメリカ生まれの不良と来ちゃねえ 珠江さん ?? で 若い者が どれもこれも まあ
(とんきように) 第二世なんて困りものでしやうね

加来 だめさ (おしかぶせるように) 第二世なんか、移民地の石ごろさ はっはっはあ (一回笑ふ)

間

皆な食事をやってゐる

敏子 炯をしに言って行く

珠江 ねえ 西村さん 敏子さんが居て下さるので随分異なりますわ (加来を見て) お禮言わなきやいけないわ

西村 (急にあらたまった様子で) やあ 加来さん、お禮曰ふのを忘れはしませんが お蔭で店がどうやら言って行けるので これも敏子さんなやうなお客なれた ちよ才の無い方が居て下さるので

加来 いやどうも いたみ入りますな 谷本さん よろしくお願します どうも気が利かぬ事が無いでしやうが 使ってください

西村 いやいや それやあ 私の方からお願いしたい位です 日本語も出来 英語もうまいので 全く敏子さんが居てくださるので感謝します

敏江 入り?る

間

敏子 (西村に) 熱いのいかが (爛瓶をさす)

西村 やあたくさん (辞たいする)

間

敏子 (加来に) 静子はよく睡ってゐますわ

加来　　そうか　今夜はゆっくり　いいさ
珠江　（二人の會話を取って）　そう睡ってしまって　何と言っても子供は可愛いわ　（敏子に）
　　ちょっと見て来ていい　ベッドルームはどこ　（珠江立ち上る）
敏子　（指差したら）　直ぐ、この戸を左に行くの　戸を開けて　右側のスイッチを押してよ
珠江　サンキュ　（向ふに行き見えなくなつて）　綺麗な寢室だこと

　　続いて　加来　用便に立つ　食卓に山田、敏子差向ひとなる　二人微笑する

敏子　　うまくいったわ
西村　（頷く）　うん　飛んだチャップスイの主人になりおわしたものだ
敏子　　でも　加来は何も知りませんわ　貴方だか　谷本さんだか　疑う気もないもの
西村　　ふふ　（苦笑する）
敏子　　珠江さん、びっくりしてましたよ
西村　　う一來る前は随分心配してみたらしい　もしもバレたらと思ってね
敏子　　うちだって　まさかそこまでは気がつきませんよ
西村　　そうよ　おれが　お前の情夫だなんてばれてみろ

　　間

敏子　（手で制して）　聲が　もっと小さく
西村　　なぐり殺されるぞ　ハハハ　（二人笑ふ）

　　加来入り来る　沈黙　珠江入り来る　　四人と以前の様に席に着く

珠江　（加来と敏子に）　静子さん　すやすや眠ってゐるわ　（感慨深げに）　何も知らぬ子供の心は美しいわ　無邪気な時が一生？の花ですわねえ
敏子　（幾分聲を落として）　私達もう一度子供になって見たいと思ひますわ
加来　（皮肉に）　もしなれたらね
敏子　　そうだわ　子供心は神様のやうなものですの　少しも邪念がないもの
西村　（致方なく）　子供時代程愉快な時はないですからなあ　私なんか早く母には死なれ　父は飲んだけで　妾ばひっぱり込むし　親の思を知らぬ子供立世
　　に不幸なものはないです　米国三界迄来て　支那メシ屋なんて　自分自身が實際　可哀想になりますなあ
加来　　かうなろうと思って米国迄も来ませんが　致方がないですなあ　運命ちゆもんだろう

敏子 本当に運命だわ 妾が貴方の妻になったのも、全く奇縁奇遇とでも言うのでしやうよ
加来 どうだか、惚れて先は鬼に角、ハッハッハあ (皆笑ふ)

寝室から 子供の泣聲が聞こえる 一同沈黙

加来 (敏子を制して急に立ち上りながら) 俺がゆく

加来去る 続いて敏子去る
間

西村 珠江 顔を見合せる 珠江 大きく 西村の背をたたく

珠江 すごいねえ
西村 (笑ひ笑ひ) 何が
珠江 (寂しやうに) 何がにしておいで 驚いっちゃった すっかり魂を抜かれっちゃった
西村 そうだろ 俺のうでわこんなものよ
珠江 敏子さんも大膽だわ 情夫を主人に??てっさ
西村 始めから分ってるぢやないか 好いて好かれた俺等だもの
敏江 加来さん ひどいぢやないの 何も知らずに酒のさし飲みで、女房は一

西村 珠江の口をおさへる 珠江 西村の手を払って 西村の顔を見る 西村にらむ
間

珠江 もう切り上げて歸りたいわ
西村 余り妬いたのでねえ
珠江 うそ 胸が悪くなっちゃった 貴方が余りづうづうしいので

加来 入り来る 同時に珠江立ち上る

珠江 (西村をうながす) どうも随分ごちそうになりましたわ (皿をかたづけやうとする)
加来 いいですよ (制して) 珠江さん その?放っててください 手をよごさなくともあれがやりますよ (聲を上げて) おい
敏子 (返事が???) ハイ

加来 もう歸るってよ

敏子 (茶の間で) もう、まあいいでしやう (呼び掛けて) 珠江さん

珠江 ——無言

敏子 珠江さん もう少し いいでしやう

珠江 (茶の間に向って) ええ有難うよ 又来るわ

敏子 貴方がそんな風(ふう)に言ふと ? 間(ま) 谷本さん迄歸ると言ふでしやう ねえ 珠江さん

西村 どうも やっ介になりまして

西村 立つ 珠江 外套を着る

加来 ゆっくりしていられしゃればいいのに (敏子に) おい どうしてゐるんだ 早くしないか

敏子 (次の??(ダブルクォー)から) 今来ますよ ナイトガウンを着換させてゐましたの

敏子 静子をだいて来る

珠江 (敏子に歩み寄り 静子を抱く) 目がさめて静ちゃん ねんねしてゐたの 静ちゃんはいいいこなのねー (静子に接吻する)

静子黙って抱かれてゐる 皆見てゐる 加来 敏子に静子を取るやうにうながす

敏子 (珠江の方に両手を差しのべて) 静ちゃん 母ちゃんに着て そして おバーさんやお父さんにまだおいでしなさい

西村 ちや 失禮します

加来 何にもなくて

加来 西村と握手する。続いて珠江と抱擁

敏江 またいらしやい 珠江さん 時には来る事にしてねえ

珠江 え 有難う

西村 珠江 出口に歩く 加来 敏子 並んで送る

加来　　ぢや　谷本さん　よろしくお願ひ致します
西村　　私こそ

西村、敏子と瞳を合せる

敏子　（急に）　あら　あなたは帽子
西村　（驚いた風で）　ああ　すっかりいいきになってゐるので　忘れっちゃって（**?**がへらろとする）

敏子　帽子かけから取って西村に渡す

西村　　いや　どうも

珠江　出て行く　西村去ろんとして

加来　　又おいで来さい　これから時々は一緒にのみませうよ
西村　（丁寧な頭を下げて）　いや　どうも有難う

幕

千九百二十八年五月十八日